

tapentadol hydrochloride (JAN)

タペンタドール塩酸塩

持続性疼痛治療剤

821

基本添付文書 タペンタ錠2021年4月改訂

【製品】 規制等：(製) (特) (処方) 《タペンタ錠25・50・100mg 2014.03.24承認》

タペンタ Tapenta 錠25・50・100mg（ヤンセン・ムンディ）

【組成】 【錠剤】：1錠中25mg, 50mg, 100mg

タペンタドール塩酸塩29.12mgはタペンタドール25mgに相当

【効能・効果】 中等度から高度の疼痛を伴う各種癌における鎮痛

【効能関連注意】 非オピオイド鎮痛剤で治療困難な場合にのみ使用する

【用法・用量】 タペンタドールとして1日50～400mgを2回に分服。なお、症状により適宜増減

【用法関連注意】 ①初回投与：本剤投与開始前のオピオイド鎮痛剤による治療の有無を考慮し、1日投与量を決め、2分割して12時間ごとに投与する ②オピオイド鎮痛剤を使用していない患者に本剤を投与する場合には、タペンタドールとして25mg1日2回より開始する ③他のオピオイド鎮痛剤から本剤に変更する場合には、前治療薬の投与量等を考慮し、投与量を決める。本剤の1日投与量は、タペンタドールとして、オキシコン徐放錠1日投与量の5倍を目安とするが、初回投与量として400mg/日を超える用量は推奨されない(タペンタドールとして400mg/日を超える用量を初回投与量とした使用経験はない) ④フェンタニル経皮吸収型製剤から本剤へ変更する場合には、フェンタニル経皮吸収型製剤剥離後にフェンタニルの血中濃度が50%に減少するまで17時間以上かかることから、剥離直後の本剤の使用は避け、本剤の使用を開始するまでに、フェンタニルの血中濃度が適切な濃度に低下するまでの時間をあけるとともに、本剤の低用量から投与することを考慮する ⑤疼痛増強時：本剤服用中に疼痛が増強した場合や鎮痛効果が得られている患者で突出痛（一時的に現れる強い痛み）が発現した場合には、直ちに速放性オピオイド鎮痛剤の追加投与（レスキュー）により鎮痛を図る ⑥増量：本剤投与開始後は患者の状態を観察し、適切な鎮痛効果が得られ副作用が最小となるよう用量調整を行う。50mg/日から100mg/日への増量の場合を除き増量の目安は、使用量の25～50%増とする。増量は、投与開始又は前回の増量から3日目以降とすることが望ましい。なお、1日投与量が500mgを超える使用に関する成績は得られていないため、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合のみ投与する ⑦減量：連用中における急激な減量は、退薬症候が現れることがあるので行わない。副作用等により減量する場合は、患者の状態を観察しながら慎重に行う ⑧投与の中止：投与を必要としなくなった場合には、退薬症候の発現を防ぐために徐々に減量する

【禁忌】 ①重篤な呼吸抑制のある患者、重篤な慢性閉塞性肺疾患の患者[呼吸抑制を増強する] ②気管支喘息発作中の患者[呼吸を抑制し、気道分泌を妨げる] ③麻痺性イレウスの患者[消化管運動を抑制する] ④アルコール、睡眠剤、中枢性鎮痛剤、又は向精神薬による急性中毒患者[中枢神経抑制及び呼吸抑制を悪化させるおそれがある] ⑤モノアミン酸化酵素(MAO)阻害剤(セレギリン塩酸塩、ラサギリンメシル酸塩、サフィナミドメシル酸塩)を投与中の患者又は中止後14日以内の患者(相互作用の項参照) ⑥ナルメフェン塩酸塩を投与中の患者又は中止後1週間以内の患者(相互作用の項参照) ⑦出血性大腸炎の患者[腸管出血性大腸菌(O157等)や赤痢菌等の重篤な感染性下痢患者では、症状の悪化、治療期間の延長を来すおそれがある] ⑧本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

【原則禁忌】 感染性下痢患者[治療期間の延長を来すおそれがある]

【慎重投与】 ①呼吸機能障害のある患者[呼吸抑制を増強するおそれがある] ②肝機能障害のある患者[代謝が遅延し副作用が現れるおそれがある。中等度肝機能障害患者(Child PughスコアB)では低用量(1日1回25mg等)から開始するなど慎重に投与する(薬物動態の項参照)。なお、重度肝機能障害患者(Child PughスコアC)における使用経験はない] ③腎機能障害のある患者[本剤の代謝物の排泄が遅延するおそれがある(薬物動態の項参照)] ④脳に器質的障害のある患者[呼吸抑制や頭蓋内圧の上昇を起こすおそれがある] ⑤ショック状態にある患者[循環不全や呼吸抑制を増強するおそれがある] ⑥薬物・

アルコール依存又はその既往歴のある患者[依存性を生じやすい] ⑦てんかん等の痙攣性疾患又はこれらの既往歴のある患者、あるいは痙攣発作の危険因子(頭部外傷、代謝異常、アルコール又は薬物の離脱症状、中枢性感染症等)を有する患者[痙攣発作を誘発することがある] ⑧胆嚢障害、胆石症又は膵炎の患者[オジ筋を収縮させ症状が増悪することがある] ⑨前立腺肥大による排尿障害、尿道狭窄、尿路手術後の患者[排尿障害を増悪することがある] ⑩器質的幽門狭窄又は最近消化管手術を行った患者[消化管運動を抑制する] ⑪重篤な炎症性腸疾患のある患者[連用した場合、巨大結腸症を起こすおそれがある] ⑫高齢者(高齢者への投与の項参照) 【重要な基本的注意】 ①本剤は徐放性製剤であることから、服用に際して嚥下し、割ったり、砕いたり、溶解したりせず、必ず飲み物と一緒にそのまま服用するよう指導する ②連用により薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、慎重に投与する。また、乱用や誤用により過量投与や死亡に至る可能性があるため、これらを防止するため観察を十分に行う ③眠気、めまいが起こることがあるので、投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械的操作に従事させないように注意する。特に投与開始時及び用量変更時、並びに飲酒時及び鎮静剤等の併用時には、これらの副作用が増強されるおそれがあるため注意する ④本剤を投与する場合には、便秘に対する対策として緩下剤、嘔気・嘔吐に対する対策として制吐剤の併用を、また、鎮痛効果が得られている患者で通常とは異なる強い眠気がある場合には、過量投与の可能性を念頭に置いて減量を考慮するなど、投与時の副作用に十分注意する ⑤本剤を増量する場合には、副作用に十分注意する ⑥医療目的外使用を防止するため、適切な処方を行い、保管に留意するとともに、患者等に対して適切な指導を行う(適用上の注意の項参照)

【相互作用】 本剤は主にグルクロン酸抱合により代謝され、チトロロームP450(CYP)の寄与は小さい(薬物動態の項参照)

①併用禁忌

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
MAO阻害剤 ・セレギリン塩酸塩(エブピー) ・ラサギリンメシル酸塩(アジレクト) ・サフィナミドメシル酸塩(エクフィナ)	心血管系副作用の増強やセロトニン症候群等の重篤な副作用発現のおそれがある。MAO阻害剤を投与中の患者又は中止後14日以内の患者には投与しない	相加的に作用が増強されると考えられる
ナルメフェン塩酸塩(セリンクロ)	離脱症状を起こすおそれがある。また、鎮痛作用が減弱するおそれがある。ナルメフェン塩酸塩を投与中の患者又は中止後1週間以内の患者には投与しない(禁忌の項参照)	μオピオイド受容体への競合的阻害による

②併用注意

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
オピオイド鎮痛剤 中枢神経抑制剤 ・フェノチアジン誘導体 ・バルビツール酸誘導体等 アルコール	呼吸抑制、低血圧及び顕著な鎮静又は昏睡が起こることがある。減量するなど慎重に投与する	中枢神経抑制作用が相加的に増強される
三環系抗うつ剤 セロトニン作用薬 ・選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI) ・セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害剤(SNRI)等	セロトニン症候群(錯乱、激越、発熱、発汗、運動失調、反射亢進、ミオクロス、下痢等)が現れるおそれがある	相加的に作用が増強され、また、中枢神経のセロトニンが蓄積すると考えられる
ブプレノルフィン ペンタゾシン等	本剤の鎮痛作用を減弱させることがある。また、退薬症候を起こすことがある	これらの薬剤は本剤が作用するμ-受容体の部分アゴニストである
プロベネシド	本剤の血中濃度が上昇することがある	本剤の代謝を阻害する可能性がある

【副作用】 ①癌性疼痛患者を対象に実施した日韓共同試験及び国内臨床試験において、副作用(臨床検査値異常を含む)は296例中142例(48.0%)に認められた。主なものは、便秘53例(17.9%)、悪心49例(16.6%)、傾眠41例(13.9%)、嘔吐37例(12.5%)であった

②重大な副作用 ③呼吸抑制(0.3%)：呼吸抑制が現れることがあるので、異常が認められた場合には中止するなど、適切な処置を行う。なお、本剤による呼吸抑制には、麻薬拮抗剤(ナロキソン、レバロルフアン等)が有効である ④アナフィラキシー(頻度不明)：アナフィラキシーが現れることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には中止するなど、適切な処置を行う ⑤依存性(頻度不明)：連用により薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、慎重に投与する ⑥痙攣(頻度不明)：痙攣が現れることがあるので、このような場合は中止するなど、適切な処置を行う ⑦錯乱状態(0.3%)、せん妄(0.3%)：錯乱状態、せん妄が現れることがあるので、このような場合は減量又は中止するなど、適切な処置を行う

⑧その他の副作用

	1%以上	1%未満	頻度不明
免疫系障害		薬物過敏症	
代謝及び栄養障害	食欲減退		体重減少
精神障害		不安、知覚障害、睡眠障害、異常な夢	抑うつ気分、失見当識、激越、神経過敏、落ち着きのなさ、多幸気分、思考異常、パニック発作
神経系障害	傾眠(13.9%)、浮動性めまい、頭痛	構語障害、感覚鈍麻	振戦、注意力障害、記憶障害、失寸前状態、鎮静、運動失調、錯感覚、意識レベルの低下、協調運動異常、平衡障害、失神、精神的機能障害
眼障害			視覚障害
心臓障害		心拍数減少、心拍数増加	動悸
血管障害		潮紅	血圧低下
呼吸器、胸郭及び縦隔障害			酸素飽和度低下、呼吸困難
胃腸障害	便秘(17.9%)、悪心(16.6%)、嘔吐(12.5%)、下痢	腹部不快感、消化不良	口内乾燥、胃排出不全
皮膚及び皮下組織障害	癢痒症、発疹	多汗症、尋麻疹	
筋骨格系障害		筋痙攣	
腎及び尿路障害		排尿困難	頻尿
生殖系及び乳房障害			性機能不全
一般・全身障害及び投与部位の状態	無力症、疲労	体温変動感、浮腫	薬剤離脱症候群、異常感、酩酊感、易刺激性、粘膜乾燥

【高齢者への投与】一般に高齢者では生理機能が低下しており、特に呼吸抑制の感受性が高いため、患者の状態を観察しながら、慎重に投与する 【妊婦・産婦・授乳婦等への投与】①妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与する〔動物実験(ラット)で発育遅延及び胎児毒性が報告されている〕②分娩前に投与した場合、出産後新生児に退薬症候(多動、神経過敏、不眠、振戦等)が現れることがある ③分娩時の投与により、新生児に呼吸抑制が現れることがある ④授乳中の婦人には、投与中は授乳を避けさせる〔動物実験(ラット)で乳汁中へ移行することが知られている〕 【小児等への投与】低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児に対する安全性は確立していない 【過量投与】①徴候・症状：縮瞳、嘔吐、心血管虚脱、意識障害(昏睡を含む)、痙攣、呼吸抑制(呼吸停止を含む)が現れることがある ②処置：過量投与時にはオピオイド作用薬の副作用に対する対症療法に重点を置き、次の治療を行うことが望ましい ③気道確保、補助呼吸及び調節呼吸により適切な呼吸管理を行う ④麻薬拮抗剤(ナロキソン)投与を行う。患者に退薬症候又は麻薬拮抗剤の副作用が発現しないよう慎重に投与する 【適用上の注意】①薬剤交付時 ②使用開始にあたっては、患者等に対して具体的な使用方法、使用時の注意点、保管方法(子供の手の届かないところに保管する)等を患者向けの説明書を用いるなどの方法によって十分に説明する ③患者等に対して、本剤

を指示された目的以外に使用してはならないことを指導する ④患者等に対して、本剤を他人へ譲渡してはならないことを指導する ⑤本剤が不要となった場合には、未使用製剤を病院又は薬局へ返却するよう指導する ⑥その他：本剤の残渣が消化されず糞便中に排泄される可能性があるが、有効成分は吸収されており臨床的影響はない 【保存等】室温保存

【薬物動態】(タベンタドールとして。*：国内未承認製剤) ①吸収・血中濃度 ②単回投与：健康成人に25mg、50mg、100mg及び200mgを単回経口投与時、血中濃度は投与後5時間(中央値)に最高濃度に達し、約4.7～6.1時間(平均値)の消失半減期で消失(図は添付文書参照)。血中のAUC_∞は用量に比例して増加。薬物動態パラメータは次表のとおり

	25mg (23例)	50mg (23例)	100mg (22例)	200mg ^{*1} (21例)
C _{max} (ng/mL)	6.61(1.67)	16.0(3.59)	32.4(7.95)	72.0(22.3)
AUC _∞ (ng・h/mL)	100(26.6) ^{*3}	218(44.6)	428(84.4)	877(213)
t _{max} ^{*2} (h)	5.0(2.0-12.0)	5.0(4.0-8.0)	5.0(2.0-12.0)	5.0(2.0-6.0)
t _{1/2} (h)	6.1(1.7) ^{*3}	5.2(1.0)	5.0(1.1)	4.7(0.7)

*1：100mg錠を2錠投与。*2：中央値(最小値-最大値)。*3：18例

③反復投与(外国人)：健康成人に250mgを1日2回反復経口投与時、3回目の投与後に定常状態に達した。このとき、AUC_∞及びC_{max}から算出した累積比は、それぞれ1.86及び1.60 ④食事の影響：健康成人に100mgを、食後に単回経口投与時の血中のAUC_∞及びC_{max}は、空腹時に単回経口投与時と比較して、それぞれ、12.1%及び54.5%高かった ⑤分布(外国人)：健康成人にタベンタドールを静注時、最終相の分布容積(V_d)は471～540L(平均値)で、体内で広範に分布すると考えられる。血漿蛋白結合率は、約20%(in vitro、限外過法) ⑥代謝：タベンタドールは、投与した約97%が代謝。主要な代謝経路は、グルクロン酸抱合で、経口投与後、約70%(グルクロン酸抱合体が55%、硫酸抱合体が15%)が抱合体として、3%が未変化体として尿中に排泄。in vitro試験で、グルクロン酸抱合に関与する主要なUDP-グルクロン酸転移酵素(UGT)分子種は、UGT1A6、UGT1A9及びUGT2B7であった。また、CYP2C9及びCYP2C19並びにCYP2D6により、それぞれN-脱メチル化並びに水酸化されるが、これらの代謝物も抱合反応により更に代謝され、N-脱メチル体(13%)並びに水酸化体(2%)の抱合体として尿中に排泄。代謝へのCYPの寄与は小さかった。なお、大部分の代謝物は鎮痛作用を示さず、鎮痛作用を示す代謝物の生成はわずかであることから、代謝物は鎮痛作用に寄与しないと考えられた ⑦排泄：タベンタドール及びその代謝物は、投与量の99%が尿中に排泄。健康成人(外国人)にタベンタドールを静注時の全身クリアランスは、1,531mL/min(平均値) ⑧高齢者(外国人)：高齢者(65歳以上)にタベンタドール速放性(IR)カプセル80mg^{*}を投与時、若年者に投与時と比べ、AUC_∞は類似していたものの、C_{max}は16%低下 ⑨肝機能障害患者(外国人)：軽度及び中等度肝機能障害患者にタベンタドールIRカプセル80mg^{*}を経口投与時、正常肝機能被験者と比較して血清中のC_{max}は1.4倍及び2.5倍、AUC_∞は1.7倍及び4.2倍高値を示し、t_{1/2}は1.2倍及び1.4倍延長。なお、重度肝機能障害患者を対象とした試験は実施されていない

《正常肝機能被験者及び肝機能障害患者にIRカプセル80mg^{*}を単回経口投与時の血清中の薬物動態パラメータ(10例)》

肝機能	正常	軽度障害 ^{*1}	中等度障害 ^{*1}
C _{max} (ng/mL)	50.9(23.3)	66.9(22.4)	132(58.6)
AUC _∞ (ng・h/mL)	257(77.3)	477(266)	1,171(516)
t _{max} ^{*2} (h)	1.5(1.0-3.0)	1.5(0.5-2.0)	1.3(0.5-6.0)
t _{1/2} (h)	4.3(0.6)	5.1(0.9)	6.2(1.5)

*1：Child-Pughによる分類：軽度障害[スコアA]、中等度障害[スコアB]。*2：中央値(最小値-最大値)

⑩腎機能障害患者(外国人)：軽度、中等度及び重度腎機能障害患者にタベンタドールIRカプセル80mg^{*}を経口投与時、正常腎機能被験者と比較して腎クリアランス及び尿中排泄率が腎機能の低下に伴い減少。しかしながら、尿中排泄率は約3～5%であるため、血清中のC_{max}及びAUC_∞は腎機能障害の影響を受けなかった。一方、グルクロン酸抱合体のC_{max}及びAUC_∞は腎機能の低下に伴い増加し、重度腎機能障害者のt_{1/2}は2.9倍延長

《正常腎機能被験者及び腎機能障害患者にIRカプセル80mg^{*}を単回経口投与時の血清中タベンタドール及びグルクロン酸抱合体の薬物動態パラメータ》

腎機能 (例数)	正常 (9例)	軽度障害 ^{*1} (10例)	中等度障害 ^{*1} (10例)	重度障害 ^{*1} (10例)
-------------	------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------------------

タベンタドール				
C _{max} (ng/mL)	58.8(20.4)	65.0(20.7)	56.5(14.1)	59.2(31.8)
AUC _∞ (ng・h/mL)	301(53.0)	364(120)	353(122)	354(189)
t _{max} ^{※2} (h)	1.0 (1.0-1.5)	1.5 (1.0-4.0)	1.5 (1.0-4.0)	1.0 (1.0-4.0)
t _{1/2} (h)	4.7(0.5)	5.4(2.0)	5.1(0.7)	8.2(2.9)
CL/F(mL/min)	4,579(919)	4,025 (1,308)	4,432 (2,243)	4,447 (1,603)
CL _R (mL/min)	105(32.5)	78.6(57.0)	60.7(37.3)	29.3(21.2)
グルクロン酸抱合体				
C _{max} (ng/mL)	2,428(624)	3,134 (1,094)	3,180(875)	3,472(734)
AUC _∞ (ng・h/mL)	13,916 (3,123)	21,258 (6,486)	36,191 (11,874)	84,942 (52,258)
t _{max} ^{※2} (h)	1.5 (1.0-2.0)	1.5 (1.0-2.0)	1.5 (1.0-6.0)	3.5 (1.5-9.0)
t _{1/2} (h)	4.3(0.2)	5.1(1.6)	6.7(2.0)	14.2(8.0)
CL _R (mL/min)	78.8(32.0)	50.0(26.7)	31.3(14.2)	12.6(7.47)

※1：クレアチニン・クリアランス(mL/min)による分類：軽度障害[50以上80未満]，中等度障害[30以上50未満]及び重度障害[30未満]。※2：中央値(最小値-最大値)

③薬物相互作用〔外国人健康成人対象。「本剤」はタベンタドールIRカプセル80mg[※](単回投与)〕 ④メトクロプラミド：本剤及びメトクロプラミド20mg(6時間間隔で2日間反復投与)を併用経口投与時，タベンタドールの薬物動態に影響は認められなかった ⑤オメプラゾール：本剤及びオメプラゾール40mg(1日1回4日間反復投与)を併用経口投与時，タベンタドールのC_{max}は約11%低下したが，AUC_∞に影響は認められなかった ⑥プロベネシド：本剤及びプロベネシド500mg(1日2回2日間反復投与)を併用経口投与時，タベンタドールのAUC_∞及びC_{max}はそれぞれ，約57%及び約30%増加 ⑦ナプロキセン：本剤及びナプロキセン500mg(1日2回2日間反復投与)を併用経口投与時，タベンタドールのAUC_∞は約17%増加したが，C_{max}に影響は認められなかった ⑧アスピリン：本剤及びアスピリン325mg(1日1回2日間反復投与)を併用経口投与時，タベンタドールの薬物動態に影響は認められなかった ⑨アセトアミノフェン：本剤及びアセトアミノフェン1,000mg(6時間間隔2日間反復投与)を併用経口投与時，タベンタドールの薬物動態に影響は認められなかった ⑩QT間隔への影響(外国人)：タベンタドールIR錠100mg[※]及び150mg[※]を反復経口投与，又は徐放錠86mg[※]及び172mg[※]を反復経口投与時，両試験で，QTc間隔(Fridericia法)のベースラインからの変化量は10ms未満(平均値)で，影響は認められなかった〔プラセボ及び陽性対照(モキシフロキサシン400mg又は800mg1日1回)を用いた無作為割付クロスオーバー試験〕 【臨床成績】 ⑪実薬対照二重盲検比較試験(日韓共同試験)：非オピオイド鎮痛剤で十分な除痛が得られずオピオイド鎮痛剤の投与が必要と判断された癌性疼痛患者340例(日本人221例を含む)を対象に，本剤25mg 1日2回又はオキシコドン塩酸塩徐放錠5mg 1日2回から投与開始し，適宜増減しながら4週間投与時の有効性と安全性を検討。有効性主要評価項目である11ポイントNRS(Numerical Rating Scale)による平均疼痛強度スコアのベースラインから治験薬投与最終3日間までの平均変化量〔PPS(治験実施計画書に適合した集団)〕は，本剤群(126例) -2.69(2.223)，オキシコドン群(139例) -2.57(2.027)，最小二乗平均値の差〔本剤群-オキシコドン群(標準誤差)〕 -0.06(0.226)，95%信頼区間(-0.506；0.383)で，上限が非劣性限界値の1を下回ったことから，オキシコドン塩酸塩徐放錠に対する本剤の非劣性が検証された ⑫非盲検試験(国内試験)：中等度から高度の癌性疼痛に対してオピオイド鎮痛剤(モルヒネ徐放性製剤，オキシコドン徐放性製剤，フェンタニル経皮吸収型製剤)を定時投与している癌性疼痛患者50例を対象に，既に投与されているオピオイド鎮痛剤の1日投与量に基づき本剤に変更し，適宜増減しながら8週間投与。有効性主要評価項目である変更後1週以内に疼痛コントロールが達成された被験者[※]の割合〔FAS(最大の解析対象集団)〕は42/50例(84.0%)，95%信頼区間(70.89；92.83)。また，本剤への変更前の11ポイントNRSの平均値(標準偏差)は1.5(1.11)，変更後8週目は1.5(1.12)で，本剤の鎮痛効果は維持された。[※]：疼痛コントロールが達成された被験者=治験薬投与期1週目の任意の連続する3日間で次の両方の基準を満たした被験者 ⑬任意の連続する3日間の24時間NRSスコアの平均値のベースラインからの変化量が+1.5未満 ⑭3日間の各日のレスキュー投与回数が2回以下 【薬効薬理】 ①作用機序：タベンタドールは*in vitro*において，μオピオイド受容体作用及びノルアドレナリン再取り込み阻害作用を示した ②鎮痛作用 ③マウス又はラットの各種動物モデル(急性侵害刺激，炎症性疼痛及び神経障害性疼痛モデル)において，タベンタドール(静脈内又は腹腔内投与)は用量依存的な鎮痛作用

を示した ④ラットのTail-flickテスト(急性侵害刺激)及び神経障害性疼痛モデルに対するタベンタドール(静脈内投与)の鎮痛作用は，それぞれオピオイド受容体拮抗薬ナロキソン及びアドレナリンα₂-受容体拮抗薬ヨヒンビンによって強く阻害。これらのことから，タベンタドールの鎮痛作用には，主にμオピオイド受容体作用及びノルアドレナリン再取り込み阻害作用に基づくアドレナリンα₂-受容体作用が寄与していると考えられる

〔性状〕 タベンタドール塩酸塩は白色〜オフホワイトの粉末。融点：204〜210℃

〔備考〕 再審査期間中(2014年3月24日から8年)